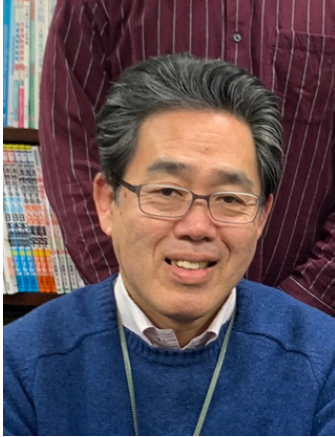


OB INTERVIEW VOL4

川島 隆太 先生 (S60年卒)



第4回目のOBインタビューは、昭和60年卒で加齢医学研究所で所長をされている、川島隆太先生にお話を伺いました。川島先生は任天堂から発売されているゲームソフト「脳トレ」の開発に携わった、脳研究の第一人者の先生です。

(聞き手：石井 梶浦 茂木)

Q：まず医学の道を目指したきっかけや東北大学医学部に入った経緯について教えてください

A：端的に言うと、僕はね中学校の頃から脳に興味があったんです。それで自分の脳をコンピューターの中に入れたいっていう風に妄想をして、その脳ってものに興味がありました。君らの時代と違って、僕らのころは脳にタッチしようとする医学部しか進学先がなかったんです。今だと理学部とか他からも回ってこれるんだけど当時は医学部しかなくて、とりあえず医学系に行って脳をやりたいと思いました。受験の時に東北大をなぜ選んだかっていうと、馬鹿馬鹿しい話なんですけどちょうど僕が受験の時にさとう宗幸が歌った青葉城恋唄ってというのが流行ってたんです。当時は今と違って現役で入るっていうよりは予備校を一年経過してから入るというのが通常で、僕も一年浪人したんですけど、試験の成績からいうと東大は厳しいと、もう一年浪人したくない、京都か東北かっていう選択肢の中で、京都だと東男と京女とか言って関東の人間はモテるかなっていう野望、でちょっと靡いたんですけど、本当に青葉城恋歌が流行って、仙台っていうのはえらいいい街っぽいぞって思って最終的に東北大に決めました。

Q：では本当にその歌が決め手だったんですね

A：そう、本当に歌が決め手。青葉城恋唄が流行ってなかったら京都大学受けてたかな笑。

Q：それまでに仙台に来られたことはありましたか？

A：一度もないよ。受験で来て騙されたって思って笑。

Q：医学部ラグビー部に入ったきっかけについて教えてください

A：まず一年浪人したんで、大学入ったら体動かしたい、運動部に入りたいっていう思いがあったんですよ。医学部の学生は当時入学式もなくいきなりオリエンテーションから始まって、川内でオリエンテーションを受けてそのまま星陵に連れてこられて、臨床の授業みたいのを一つ受けさせられて、その後今の食堂のところに連れて行かれてミルコンっていうのが始まったんですよ。そこに色んな運動部の人たちが流れ込んで

くるの。それでどっか運動部入りたくなって思った時に、ラグビー部の先輩たちに襲われてそのまま部室に連れて行かれて飲まされて、で深谷先生の裸踊りを目の前にして、こんなカオスで面白い世界があるんだって思って入部しました。なのでラグビーをしたっていうか運動をしたって思って、ミルコンでラグビー部の連中に誘拐されたっていうのが理由です。

Q：では半ば強引に連れて行かれてその流れで入部したという形ですか？

A：そうだね。他の部活ほどひどくなかったけどね笑。ある部活はもっとひどくて、体の大きい人は下宿先まで誘拐してきたから。それで布団とか机とか全部持ってかれてそのまま合宿所に連れて行かれてたよ。その部活に誘拐される前にラグビー部についていう感じかな。

Q：医学部ラグビー部での思い出は何かありますか？

A：思い出だらけですよ。君らと同じって言ったらかわいそうだけど、当時ネジの飛んだ人間っていうのはラグビー部かサッカー部に入るっていう雰囲気があったんですよ笑。もちろん飲み会っていうのもめちゃくちゃ荒れる飲み会でしたね。国分町のアーケードの上、あの屋根の上を走り回ってサッカー部のやつが走り抜けて落ちた、とかいう話をするような楽しい時代を過ごしましたね。特に食い放題とか行くとね、とにかく肉を食って言われました。食べられなくなると壁押ししろって言われて、店で壁押しをしてそれでお腹開けてから食べての繰り返しですよ。他で唯一食べていいのが、タンパク分解酵素が入ってるからパイナップルだけはいいよって言われて笑。そういうアホなことをしましたね。練習も僕らはラグビー部ができて1年から6年までやった最初の学年なんですよ。

深谷雄一郎*1)先生というレジェンドが作ったラグビー部で、彼は君らも知ってると思うけど、高校ジャパンまで行って、釜石を引っ張った松尾雄治とトイメンでずっとやってたすごい人ですよ。それで僕らが1年生で深谷先生が6年生の時かな、試合とかで深谷先生のすごさを見せつけられましたよ。すごかったですよ、敵も味方も振り切るんですよ笑。ただやっぱり彼は2浪して6年目だから高校卒業してから8年経つから、流石に身体のキレも体力も無くなって、味方が追いつけない遠くで敵に囲まれて、助けに行った時にはもう球を取られているっていうような、そういう結構はちゃめちゃな試合をしてました。ポジションも身体が大きいていうだけで最初PRからスタートして、学年が上がるとどんどん後にいって、LOになってNo8になって最後はFBになって卒業するよな、そういう草ラグビーが楽しかった時代を過ごした感じですね。僕らの二つ下の後輩で前の医学研究科長の五十嵐先生*2)達が入ってきて、彼らとも合宿とかで楽しくやった覚えがありますね。あとは本当にお金がなかったので、例えば筋トレするっていてもバーベルなんて買えなかったんで、バケツにセメント入れて鉄の棒突き刺してバーベル作って、でもスクワットの仕方なんて誰も知らないんで、とりあえずバーベルかついで何かするっていう、そういうなんかヤンチャな創世記を過ごしたって感じですかね。楽しかったですよ。

Q：先生が思う医学部ラグビー部の魅力を教えてください

A：やっぱり一つはバカになれるっていうのがすごくいいと思いますね。やっぱり東北大学の医学部に入ってくる子って結構みんな勉強してきて頭でっかちなところがありますね。体だけが資本のスポーツでかつFor the teamですよ、仲間のために自分を犠牲にするっていうことを体感、体験できたのがいい経験でしたね。やっぱりラグビーで一番学んだことっていうのは、とりあえず前に一歩でも出るってことです。それが凄く大事だっていうことを学んだなと思っていて、実際に働き出してからも色んな障害があるんだけど、ラグビー部出身者っていうのはそれに負けそうになるんだけど、負けそうになってもとりあえず一歩だけ前に、倒れるにしても前に倒れようっていう気持ちでやってこれたのが、こうして大学の中で残れた理由かなって思いますね。無責任パスもよくしたけどね笑。

Q：初期研修でのお話やその後現在に至るまでのキャリアパスについて教えてください

A：僕らの頃は初期研修ってなかったんですよ。だから君たちとは違って僕は大学院に入学をして、大学院の研究室から直接古川の方の臨床研修に1年間行って



また戻ってきてっていう感じです。僕はもともと脳の研究がしたかったので、大脳生理学も視野に入れたんですけども、どうしても人間の脳研究をしたかったんです。それで僕がちょうど大学を卒業する時に東北大学にポジトロンCTが国立大学で初めて入ってきて、それを使うとどうもがんが可視化できると同時に脳も可視化できるらしいという噂を聞きつけたんです。それでその装置が抗酸菌研究所(今の加齢医学研究所)の放射線科が独占的に使っているということがわかって、じゃあそこに入ろうってことで大学院に入りました。その時の主任教授の考えで、”僕らの競争する相手っていうのは医学部生だけじゃない、理学部とか農学部とか色んなところがこれから脳研究に入ってくる、そうした中で我々は他の学部比べて2年間卒業が遅いっていうハンディキャップを背負って、で海外に競争で勝つには臨床医としての見方を研究に生かすことで理学部や農学部のやつらに負けなだけの知識を得られる”という方針で1年間はまるっきり内科の臨床やってきました。胃カメラなんかもできますよ。それから大学院に行って正式に脳研究を始めました。ただ人間の脳研究をポジトロンCTを使ってやった人が日本にいなかった、だから教えてくれる人がいなかったんですよ。そこで僕の戦略っていうのは、まず当時進んでいたサルの大脳生理学の手法を学んで、大脳生学者が何を考えているかを肌で掴んだ上で、それをヒトの脳研究にそのままもちこもうというものでした。当時東北大学の大脳生理の教授の丹治教授、彼に相談して京都大学の方に1年間内地留学させてもらって、サルの脳研究をしてました。それでその技術を使ってヒトの脳研究を始めました。ただ師匠がいなかったんでやっていたので花は開かないんですよ。転機になったのが留学ですね。ちょうど論文を読んでいたら、こころの働きをポジトロンCTを使って画像化した、という論文がスウェーデンから出たんです。それが僕が本当にやりたかったことなので、先越されたって思いました。それで慌ててその論文を書いた先生のところに、当時はE-mailもないからタイプライターで手紙書いて国際郵便で送って、あなたのところで勉強させてくれて内容

を送ったら、すぐ来ていいよってことだったので、ストックホルムにあるカロリンスカ研究所に留学して、最先端の人間の脳研究の仕方を学んでそれを日本に輸入して帰ってきて、日本の中で展開していきました。なのでヒトの脳研究っていうのは僕が日本で最初に始めたんですよ。それからヒトの脳研究、ところがどういう風に脳の中で表現されているのかを30年以上展開してきたんだけど、その中で研究を社会に還元、フィードバックする活動の一つとして、みんなも知ってるかもしれないけど脳トレっていうものが生まれてきました。それは基礎研究とは全然違うところで僕らの研究成果を世の中に活かすために、研究とは違うラインで社会貢献活動としてやろうっていうことで始めたのがいわゆる脳トレシリーズの開発という形になっています。ずっとそういう研究を続けて一步一步前に進んで今があります。

Q：今では様々な学問が融合して研究が進んでいるように感じますが、当時は違ったんですね

A：僕らがスタートした時はMDだけの世界で、国際学会すらなかったんですよ。ちょうど僕がスウェーデンに行ってる頃に国際学会をヨーロッパで作ったんですよ。その時に会議に出席した日本人は僕と京都大学の教授の二人だけでした。最初の国際学会を開催したのが1995年だったかな、800人しか集まらなかったんだ



けどそこからだんだん人が集まり出して、3年くらい立つと心理学者がヤマのように入ってきて、フィールドが脳のMDからNon-MDの心理学者が入ってきて、2000年くらいになると心理学者以外の文系の人たちもたくさん入ってきて、一気にプレイヤーが増えたって感じですね。

Q：現在のお仕事について教えてください

A：まず一つはこの研究所の所長をしているので、Administrationといって所全体をどっちの方向に動かして人事をどう動かすか、というような管理部門の仕事をやらざるを得ない状況で、9年も所長をやってしまいました。脳研究の部隊としては、人間のここは脳のどこにあるのか、っていうのを捕まえようとする研究部隊が1チームあって、あとヒトを対象とした実験をしているとどうしても細かいことわからなくなるので、ネズミの脳の計測装置を買って、ネズミの脳の活動を調べる研究を、ネズミはもっと詳しく分子生物学的なところまで調べる基礎研究のチームを一つ作ってやっています。あともう一つ社会貢献の方はニーズがすごく高いってことがわかったのでそれもやっています。ただこれは研究者にやらせても将来のキャリアになるかわからなかったのが、僕はキャリアが出来上がっちゃってるので僕が一人中心となって、社会貢献活動の研究を行うことも、ラインとして走らせてます。その社会貢献活動で言うと、仙台市の教育委員会と一緒に子どもたちの学力と生活習慣の関係をずっと追跡調査するっていうのをやっています。スマホ使うほどアホになるぞとか、ギガスクールコースをやればやるほどバカになるっていうようなデータを出したりとか、そういったことも社会に対するメッセージとして発信しています。

Q：医学部ラグビー部での経験や活動が現在の仕事に生きていると実感することはありますか？

A：そうだね、学者っていうとメスでサササッと切っ
て細かい仕事をしながら道を切り開くっていうイメ
ジを持つかもしれないんだけど、実際はすごく鈍臭
い、泥臭いんですよ。本当に一步一步、力技で前に進
んでいって、本当に必死になって力技で前に前に押し
ていくと、突然パッとトライできているっていうのが
見える。それが学者といて生き残る唯一の手段らしい
と感じます。それをラグビーをやってて自然と会得し
てたんだと思います。とにかく前に押ししかな
い。そして前に前に押ししてボールを回していくう
ちに、なんとかうまくトライが取れるっていう感覚
とすごく似ていて。諦めずにとにかく愚直に研究を前
に押すっていうそのころは、多分ラグビーを通して
身についたんだらうなあって思います。そこが割とスマ
ートになんでもこなした連中は同じ学年の中でも頭よ
かったんだけど、やっぱり途中で折れて脱線してしま
って大学には残れていないですね。僕の同期は3人い
たけど、僕はここで所長やって、SOやってた加藤先
生は筑波大学の副学長してるし、2つ下の五十嵐先生
も研究科長になりましたしね。多少頭打って力技使え
るっていうのが大学で生き残るには有効かなって思
います笑。

Q：現役部員に一言お願いします。

A：まずはとにかく楽しめ、がんばってことです
ね。一番はやっぱりバカになれって話です。どうして
も東北大学の医学部に入ってくるとプライドあると思
うんだけど、そのプライドを持って医学を学ぶって
いうのは当然大事なんだけど、そういう人間で折れるか
らさ、見ててね。やっぱり一生懸命ラグビーやった
という経験が、その先社会出てから折れない人間にな
る、折れ辛くなるっていうことに直接繋がるので、思
いっきり落第しない程度に楽しんでもらえればいか

などと思います。ただ僕らの頃と比べて随分厳しくな
ったね。進級とかも厳しいし試験とかもあるしね。僕ら
の頃は本当いい加減だったので先輩からきた情報をそ
のまま、情報さえあれば試験は追試、追追試を受けて
なんとか合格すれすれでやれてましたからね。時代が
違うから同じとは思えないけど、やっぱりしっかりと
楽しんでラグビーの精神を持ち続けて卒業できれば、
多分自分のやりたい世界で生き残るのでしっかりと落
第しない程度に楽しんでください。

Q：最後に新入生にメッセージをお願いします

A：ラグビーを一生懸命続けていると、多分、卒業し
た後道が切り開けてくると思います。ラグビーを通し
て、医者になった時に必要な精神的な柱を作ること
ができると身をもって体験しているので、是非是非、そ
の後大きく未来が開けやすくなっていると信じて、学
生時代は勉強とスポーツに明け暮れて欲しいと思いま
す。

*1) OB interview Vol.5にて掲載予定。弊部の創設
者。

*2) OB interview Vol.2にて掲載中。東北大学大学院医
学系研究科 生物化学分野 教授。

川島先生、お忙しい中お時間を頂きありがとうございました。
(文責：石井)

